

研究所ニュース

No.61

2018.2.28



特定非営利活動法人

非営利・協同総合研究所いのちとくらし

〒113-0034 東京都文京区湯島 2-7-8 東京労音お茶の水センター2階

Tel. 03-5840-6567 Fax. 03-5840-6568

E-mail: inoci@inhcc.org <http://www.inhcc.org>

【理事長のページ】(No.61)

公共空間あるいは公共圏（1）

中川 雄一郎

私は常々思っているのであるが、私には「生活習慣」というよりはむしろ——もしそういう言葉があるとすれば——ある種の「生活癖」があるのかもしれない。それは、5、6年ほど前からであるが、いくつかの新聞記事、特に約1～2カ月間ほどの日刊紙の記事を保存する癖である。なぜそのよう癖がついてしまったのかと言えば、新聞に記載された政治、経済、社会、文化、思想、歴史（それにたまにはスポーツ）の領域に関わる多少専門性のある記事にじっくり目を通し、それぞれの内容について私なりの評価をしようと考ええるようになったからだ、私は記憶している。

朝日新聞朝刊を例にとれば、私が保存した記事の多くは、2ページに及ぶ「オピニオン&フォーラム」欄のそれであり、それには社説をはじめ、読者の声、インタビュー、紙面批評、記者の意見、それに「耕論」おおび「政治季評」と称するオピニオン欄、それに読者の「声 voice」と「朝日川柳」欄などでびっしり組まれているので、それなりの厚さになる。

思えば、かつての「理事長のページ」（2012年2月）で私は『『無言国ニッポン』の深層心理』と題するエッセイを書いたが、それは、84歳の老人と13歳の少年が投稿した朝日新聞の「声」欄に掲載された投稿にヒントを得たものであった。このエッセイの一部を私は今でも協同組合の講演などで使っている。そこで今回の「理事長のページ」にもこの手法を真似て、本号と次号の「理事長のページ」を埋めていくことにする。ただし、本号は「公共空間あるいは公共圏」と題するエッセイの「その（1）」としてであることをお断りしておく。したがって、ユルゲン・ハーバマスが唱えて知られるようになった「公共空間あるいは公共圏」については次号で論じることになるので、ご承知おきいただきたい。

そこで、ここでは2018年1月16日に刊行された朝日新聞朝刊「耕論」欄の「英国流どこへ」について、次の3名「（1）林 春樹・欧州三菱商事社長（2）ロビン・ニブレット・英王立国際問題研究所所長（3）新井潤美・上智大学教授」の方々がインタビューに答えているので、ここで簡潔にそれぞれのインタビュー内容を記すことにする。なお、

インタビューの「英国流 どこへ」の聴きどころは「EU からの離脱交渉が進む英国。2016 年 6 月の国民投票で離脱が決まってからは、先行きを悲観する論調も目立つ。栄華を誇ったかつての大英帝国の、足元と未来とは」である。

(1) 英国社会の特質は、すぐに結論を出さず、十分議論すること。話は相手の興味をそそる形でなるべく長く続けていくことが大事。第 2 次大戦以前に英政府が出した宣伝ポスターにある「キープ・カーム (keep calm, carry on, 平静を保ち、普段の生活を続けよ)」です。慌てず、状況を把握した上で対応していく大局観が海洋国家としての成功につながった。(中略) 日系企業が……ロンドンの金融街シティを移転することは不可能でしょう。最大の懸念は (EU) 離脱によって優秀な人材が流出すること。農業分野では、(農業に) 従事する EU 移民が入れないと、(農業を) 維持するのが難しくなる。(中略)

製造業とサービス産業での連携やイノベーション (新機軸) でどこまで協力できるか。英国は毎年、再生エネルギーの比率を高め、ガソリン及びディーゼル車禁止に向けたルール作りでも先行している。持続可能な開発目標 (SDGs) を積極推進し、国際規範を作るパートナーとして、英企業や政府を巻き込んでいけないか。英国は決めたことは守ってくれる。多極化し、不確実性が高まるいま、日英両国がお互いに寄り添っていくことが、今後のリスクへの担保になる。(後略)

(2) (前略) 英国には EU から離脱しても国際社会の主要プレーヤーとしての能力がある。英語、標準時、ロンドン、世界との歴史的つながり、世界屈指の情報機関。国際安全保障理事会の常任理事国、G7 (主要 7 カ国首脳会議)、G20 などの地位は変わりません。皮肉なことに、EU を離脱するが故に、英国は自国の外交、防衛、開発の各面で拡充を目指すことにもなるのです。それが世界にとって健全かどうか。(メイ首相が掲げる)「グローバルな英国」はより競い合う、ある種危険な英国かもしれない。例えば、対ロシア対策で EU と意見が対立するかもしれない。ロシアが独仏の分断を図ったとき、ドイツを支持すべき英国は EU 首脳会議にはいません。多国間外交の代わりに英独二国間で調整しようとする。それは 20 世紀的な世界になることです。

英国の将来を考えると、不安定要素は、ブレグジット (EU 離脱) 交渉の行方、米トランプ政権、欧州全域で高まるテロの 3 点でしょう。トランプ政権の登場で、英国は日本と同様に地政学上、かつてないほど不安定な状況に置かれている。……安全保障や経済面で米国の揺るぎない支持を求めることはもはやできない。経済面で米国が EU の代わりになると考える人は英国の中では多数派ではない。米英二国間の貿易協定は英国にとって必ずしも最善の利益にならないでしょう。

「グローバルな英国」がより安全な世界をもたらすかは、英国が軍事面で強い欧州をつくることに協力するかにかかっています。……欧州の安保に英国が無条件に貢献することは、英国、欧州互いの利益になります。

日本にとって、欧州市場への玄関口としての英国は失われるでしょう。半面、「EU ではない国」は、世界中の多くの国々にとって潜在的に興味深いパートナーになり得る。英国は日本と豪州、インドなどと特定の外交政策で EU を気にせずに連携できるようになる。英中関係もそうです。……「グローバルな英国」は、現在ではスローガンでしかありません。でも、将来的には実現することは可能です。

(3) 一昨年に英国の国民投票で EU 離脱派が勝利した時、日本では「大英帝国の栄光をいまだに忘れられない」といった解説がされましたが、私は帝国意識というより

も「島国根性」(insularity・insularism)の方が大きな要因ではないかと思っています。

英国の島国根性というのは、他の国に対して関心がない、外国のことをあまり勉強せず、知識もないことです。英国人が欧州という時、多くの場合、そこには英国は含まれません。この気質が定着したのは、ヴィクトリア女王が在位したヴィクトリア朝(1837～1901年)の時代でした。国が繁栄して中産階級の力がさらに大きくなり、自分の国に最も興味を抱く人たちが増えました。

週刊誌記事によると、国民投票で離脱派が勝った日の翌朝、ある地方の肉屋がすぐに、店頭の重量表示を法律で義務づけられているキログラムから違法なポンドに変えたことが地方紙で報じられると、全国の食料品店主から「勇気ある行動」と賛同のメールが殺到した、ということもあったそうです。一般レベルでは、何でもEUによって決められている現状への不満から、以前の英国流に戻れるという程度の理解しかない人が多かったようです。

若者の間では島国根性的傾向が徐々に薄れているようです。子どものころからメートル法に慣れていて、伝統的な単位への執着も強くない。……ただ、社会全体が「脱島国根性」に向かっているかといえ、そこまでは行っていないと思います。(反対に)最近、1930年代から50年代にかけて書かれた古き良き英国の姿を描いた娯楽小説が復刻されて人気を集めるといった英国的な価値への回帰の動きもあります。また英国の市民権を得ようとする者に課せられる「英国での生活試験」では、生活に必要な教育、医療、各種手続きの知識に加え、英国の歴史、文化に関する知識も試されます。英国的アイデンティティを大事にしたいという気分はまだ強いようです。

この3名の意見が「公共空間あるいは公共圏」にどうつながるのか、ご想像ください。
(2)に続く)

(なかがわ ゆういちろう、理事長・明治大学名誉教授)

○事務局活動報告

【11月】

- 09日 第3回事務局会議
- 17日 第3回理事会
- 30日 研究所ニュース No.60 発行
 - ・ニュース No.60 編集
 - ・機関誌 61 号編集
 - ・報告書準備

【12月】

- 02日 オウエン協会研究集会参加
- 16日 坂根利幸さんをしのぶ会参加
- 21日 15周年シンポ打ち合わせ

31日 機関誌 61 号発行

- ・61号編集
- ・PCセットアップ
- ・報告書準備

【1月】

- 12日 第4回事務局会議
- 19日 第4回理事会
- 27-28日 医療福祉政策学校参加
 - ・四半期決算、支払調書送付
 - ・報告書準備
 - ・62号編集



【韓国だより】

文在寅(ムン・ジェイン) ケアについて

朴 賛浩

韓国でキャンドルデモを背景に新たに誕生した文在寅(ムン・ジェイン)政府は、2017年8月9日にいわゆる<文在寅ケア>という医療政策を発表しました。文在寅ケアの中核は、保障率を現在の平均63%から、今後5年間に渡って平均70%へ増加させるというものです。これに要する費用については、健康保険運営の黒字剰余金10兆圓(ウォン)、健康保険料引き上げ(年平均3.2%引き上げ)で15兆圓、国家財政5兆圓の合計30兆圓を調達する予定です。言い換えれば、健康保険の費用の支払いを今までは患者さんが37%を負担したが、今後は30%へ減らしてくれることになります。

発表した当日、韓国の進歩的な保健医療団体の連合組織といえる「医療民営化阻止と無償医療実現のための運動本部」はすぐに「あまりにも不十分である」という声明を発表しました。彼らは「文在寅ケアは多少進展した政策だけれど、70%保障はとても低い」と主張しました。彼らは、このような主張のほかにも「非給付項目の全面的給付化を達成しなければならず、民間医療保険の縮小案がない」と批判しました。一方、主に医院級の医師が主軸である「大韓医師協会」は、文在寅ケアに反対しながら、「非常対策委員会」を結成しました。彼らは2017年12月10日、医師集会を開催し、「文在寅ケア」の撤回を要求しました。医師協会の要求は、特に非給付項目がなくなることについて懸念を表明しました。

以上から言えるように、文在寅ケアは市民運動からは保障率が低すぎるという側面で批判されたが、これまで患者負担増加の主な原因であった非給付項目をこれ以上追加しないようにするものです。文在寅ケアは既存の非給付を現在モデル事業の中にある「新包括報酬」として保全し、今後、患者さんの追加負担を抑制したという側面から一歩前進した側面があります。

周知のように韓国の健康保険は「総診療費=給付+非給付」の形で表すことができます。

韓国政府は、医療機関の(歯科や漢方を除く)診療費で非給付が占める割合を総診療費の平均17%水準と判断しています。すなわち、上記の提示した式を費用の負担主体の観点で再び表現すれば、総診療費=保険者負担(給付63%)+患者本人負担(給付20%+非給付17%)です。これを文在寅ケアでは総診療費=保険者負担(70%)+患者本人負担(30%)に変換します。もちろんこれはOECD平均保障率80%(保険者負担)に比べては10%が足りないのですが、今後徐々に改善する方向で推進していくと思われます。

これまで韓国の医療機関は非給付項目を拡大する方式で収益を達成してきましたが、以降は強力な歯止めがかかるようになります。非給付項目は日本の「混合診療」と原理は同じものですが、韓国の場合がはるかに広範囲なものです。例えば、超音波検査はたいてい非給付費用に属しています。このような非給付検査を医者が患者さんに勧めた場合、患者さんたちは、大部分これを受け入れるしかないのです。たいがいの民間病院は、このような非給付を利用して利益を創出してきました。

結局、今後、文在寅ケアが成功的な定着するかどうかは、政府が非給付をどのように補填して、運用するかどうかにかかっています。文在寅政府は非給付をいったん「予備

給付」に転換させて、医療系+専門家+市民、患者、労組が参加する仮称「文在寅ケア委員会」で十分に議論するという方向です。また、現在モデル事業を運営している医療機関の損失を新包括報酬として適切に補填するという方針です。

新包括報酬は3つの内容で構成されています。即ち、既存の包括報酬（DRG）はそのまま維持して、包括報酬に含まれていない「非包括報酬」は現在の行為別報酬を認めるが、薬と治療材料は80%だけを認めます。そしていわゆる「加算報酬」を新設し、最大35%を支援する計画です。いわば新包括報酬=包括報酬+非包括報酬+加算報酬で構成されると言えます。医療機関の立場ではいわゆる「加算報酬」をどれほど得られるかがカギとなります。加算報酬の構成は、1)効率性の努力に15%、2)公益的役割に15%、3)その他のモデル事業に参加する病院に支給すること(5%)になります。したがって、加算報酬は財政健全性への寄与度や医療の公共性に対する貢献度を評価するためのものです。文在寅政府の政策の意図が、まさにここにあるといえます。

(パク・チャンホ、グリーン病院 事務処長)



【海外医療体験】

スペイン透析体験記（その1）

石塚 秀雄

1. きっかけ

海外で透析を受けてみようと思いついたのは、透析を始めてから一年あまりすぎたからであった。透析を受けるまでの我慢の時期もちょっと苦しかったが、数年踏みとどまったのも、透析になると決定的に大変になり海外にいけなくなると思っていたからであった。

透析暮らしとなり、ああもう外国にも行けないかと、なんとなく人生黄昏気分になっていたが、そのうちなにか積極的なことをしないとつまらない気がしてきた。たまたまスペインの友人と電話でそんな話をしたら、病院なら見つけてあげるから、遊びに来いという話になった。マドリッドの透析病院案内などを送ってきたので、俄然、現実味を帯びてきた。ちょっと何かに挑戦してみたいという元気がでてきたのである。2017年4月くらいのことである。

2. 事前準備のこと

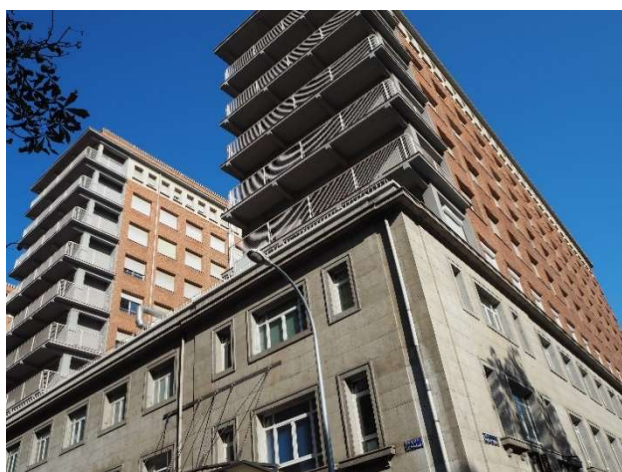
友人のマドリッドのスペイン人夫妻が探してくれた連絡先がALCER(アルセル)であった。私の場合はスペイン語を商売道具の一つにしているので、アルセルと直接スペイン語での電子メールで連絡をとることにした。アルセルはALCER(Federacion Nacional Alcer, Asociacion para Lucha Contra las Enfermedades Renales)で「腎臓病と戦う協会」という意味の全国連合会であったが、マドリッドに行くまで、てっきり病院だと思い込んでいた。

アルセルとの連絡はもちろん英語でもよいのであるが、経験上、大事なことはその国の言語でするほうが、スムーズに運ぶ。お互い外国語というのはやはり互いに隔靴搔痒の気味があるのである。透析の提出データ書類の書式が送られてきたが、英語である。いろんな国からvisiting patientが来るのであるから書類は英語であろう。書類は透析の履歴、内容、医師の所見、血液分析表、エイズなどの感染症の検査、現地(マドリッド)での滞在先、支払い方法などであった。エイズ検査はきつと変なヒアリのような人間が

国に入ってきては困るという用心であろう。書類は、医師が英文で所見とデータを記入してくれた。医師の先生も、がんばって英語をかいてくれると言ってくれたので心強かった。この書類の作成に約1ヶ月かかった。一応、下書きということでマドリッドの病院に送って、追記等あれば連絡をもらうことを確認した。しかし、一月たっても連絡が来ない。問い合わせると、担当者が夏休み(3週間くらい)でいないから、もどってきたら連絡するというのんきなことであった。旅行は約1週間ときめて、滞在中3回の透析をうける予定を立てた。飛行機の所要時間はブリュッセルまで約11時間、ブリュッセルからマドリッドまで2時間である。飛行機の中で、体調がもつのかどうかは最初の心配であった。なにしろ、特急電車などで2時間じっとしていると足や体全体にけいれんのようなものが起きて苦しくてしょうがなくなるのである。書類は出発前日の透析のときにデータを病院からもらって、それを事前に電子メールで送り、なんとか機上の人になったのである。出発日は9月19日である。

3. マドリッド第一回目の透析

しばらく来なかったマドリッドは中心街も建物の壁も洗ったのか明るく、特に地下鉄はモダンに明るくなっていた。事前にデータは病院に頼んで作成してもらい、送ったのであるが、血液検査の必要があるということで、当初予想したアルセルとは違うマドリッド中心地に近い、キロンサンカミーロ(Hospital Quiron San Camilo)という病院が指定されて、朝8時についた。総合病院である。10階まであり、病棟は4つの階を占める。



まだ、受付の部屋にほとんど患者はいなかった。血液検査のデータは9月に入ったものを日本から送ったはずであるが、素人なのでその辺の事情はわからなかった。データが古いと言われたが、やはり自分たちで最新の血液データを確認しないと不安なのかもしれないと想像するのみである。壁の案内表示のテレビ画面で番号が表示されてチンと音が鳴ると、受付にいき、血をとるまでに約1時間待った。採血室は受付の横にある部屋である。血をとるとガーゼとテープで押さえておしまい。しばらく押さえているとは言われなかった。廊下を通り過ぎる職員は足早で上下の白衣を着ている。血液検査の結果がでるまで待つということで、透析の開始は午後1時ということになった。その間、今日の費用の支払いをしなければならないが、出発前には透析一回につき300ユーロ(約4万円)ということであったが、検査費用等含めて日本円で14万円支払うことになった。これが民営化の一端であるかと思われた。クリームをつけるわけにもいかない。



当初は現金で支払うつもりであつたが、これでは初日から持ち金全部をださなくてはならないので、クレジットカードで支払うことにした。やはり、外国ではどういうことが起きるかわからない。それになぜ、ALCER ではなくてこの病院が指定されたのか。やがてわかることだが、ALCER はコーディネーター団体で、病院そのものではなかったのだ。だから、金曜日の二回目の透析の病院はどうもこのキロンサンカミーロ病院ではなさそうであつた。それはまだ決まっていなかったのだ。



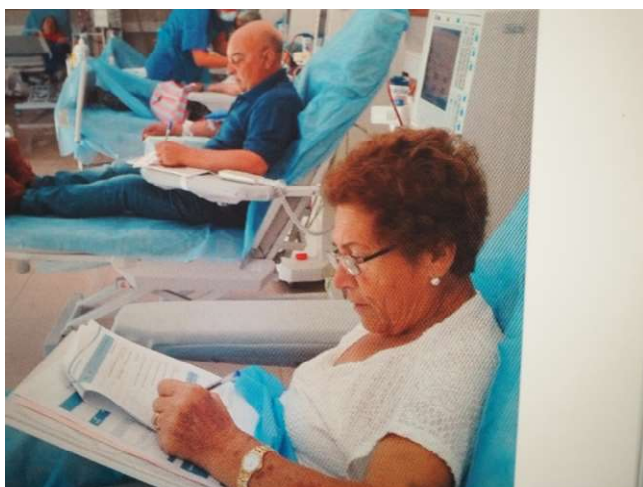
血液検査の結果を待ち、午後に透析ということになった。時間があまったので、すぐ近くにある公立病院ユニバサリア・プリンセサ病院の建物を見に行つた。大きな 8 階建て 4 棟ほどの大きな規模である。透析センターも中にある。人の出入りが活発である。ここで受け付けてもらえればよいのだが、やはり外国人は二の次となるのが公的病院であろう。

さて、午後になりキロン病院に戻る。透析室は 2 階にある。透析前の説明や打ち合わせにいかわり男女二人の看護師が来た。きさくで陽気であつた。

透析患者の年寄りが一人とか付き添いの家族とかを伴ってやってきて、透析室のドアへと消えていった。いよいよ呼ばれて部屋に入ると 10 位のベッドが見えた。見えないところにも同じくらいベッドがあるようだ。ベッドが半分くらい、肘掛けつきのリクライニングシートのようなものが半分であつた。横にある器械は日本とだいたい似たようなものであつたが最新式ではなかった。商標は確認できなかった。写真を撮るのはだめといわれた。パジャマを持参したが、みんな平服で横たわっている。まずは体重を測定したが、ポケットには財布などいろいろ入っているし、困ったなと思った。とりあえず、ズボンやシャツの重さを考えて、出た数値の 1 キロマイナスすなわち、基準体重のプラス 1 キロの数字で考えることにした。ともかく横になって、白い布をかけられた。女性の看護師二人が来て、てきぱきと愛想良く針をさし作業を進めた。しばらくして器械が何回か鳴るので針の調整かなにかをしていた。ベッドの間隔は 1.5 メーターくらいで、両隣は爺さんが平服で横たわっている。無口で頑固そうな表情で眠っている。看護師がときどき様子を見に来て、「ホセ大丈夫なの」とか「ヘスス・マリア大丈夫か」と声かけをしている。こちらは名字ではなくて名前をよぶ。ともに爺さん患者である。血圧帯は腕に巻きっぱなしで、小一時間に一回自動的に計測する。とくに血圧がどのくらいかという声かけはなかった。テレビはベッドについているのではなくて、壁にいくつか掛かっている。待合室の壁テレビのような感じである。私の近くのテレビは、スポーツ番組をずっとやっていた。

一時間ほどするとスタッフがやってきて、食べ物飲み物はいるかと聞いてきた。すこし驚いて、いいんですかと聞くと、コーヒー紅茶その他、ボカディジョ（フランスパンに生ハムをはさんだもの）サンドイッチなどが選べるという。なんでも経験してみたいので、食欲はなかったが、ブラックコーヒーとジャムサンドイッチを頼んだ。やがてトレイに持ってきたのはハムサンドイッチであつた。トレイをおなかの上にぼんと置いてくれた。それから、スタッフがインスタントコーヒーの袋を開けて作ってくれて、また

サンドイッチの袋を開けてくれた。食べ物くずがでないようなシンプルなハムサンドである。時間はあるのでゆっくり食べる。スタッフは10人くらいがたちはたらいである。2時半くらいが交替の時間らしく、半分くらいのスタッフが患者に挨拶しながら部屋を出て行った。2時間くらいすると、三十代後半の男性医師が来て、なににスペインに来たのかとか、これまで透析中になにか問題が起きたことがあるか、けいれんはおきていないかなどと英語で質問をした。日本からのデータを



ちゃんと見ているらしい。なにかあれば声をかけてくれと言って、隣の患者のところに行って話しかけていた。スペイン人は怠け者という誤解が一部にあるが、見るところそんなことはない。仕事中は足早できびきびしている。病院でもレストランでも同様である。足にけいれんとかかゆみがでてきてだんだん耐えられない気分になり、終わる時間が待ち遠しい。看護師が来て「あと五十分」と器械を指して言った。ようやく時間となり、やはり指で2カ所を同時に10分くらい押さえて、絆創膏を貼ってもらい、第一回目は終わりとなった。その頃になると新しい患者がやってきて40代の男性、両足が途中でない車いすの老人、賑やかな老婦人などがベッドや寝椅子に上がった。全体として透析は、当然だが日本とあまり変わらない。スタッフも必要なときに数人で患者に対応している。声かけをして老人たちの様子を確認しているのも日本と同じである。

4. ALCER 透析アソシエーションのこと

翌日、連絡を取っていたALCER(アルセル)に担当者のアナさんに会いに行った。ALCERが病院ではなくコーディネート団体かつ患者団体であることが事務所を見て納得した。きれいな事務所の1階には、パソコンをにらんでいる職員が5人ほどいた。40くらいに見えるアナさんも20年前に腎臓移植をしている人だそうだが、普通に元気そうに見える。以下、アナさんの説明と資料からわかったことの概要を記す。

アルセルは患者団体として40年前に設立されて、今は全国に支部がある非営利組織である。会員数は約1万人である。ほかに同様の全国組織はあるのかと聞いたがないそうである。スペインに腎臓不全の患者は約5万人いるとのこと(2014年)(スペインの人口は約4,500万人)。そのうち腎臓移植患者25,824人(51.7%)、透析患者23,512人(42.8%)、在宅腹膜透析患者3,026人(5.5%)となっている。透析にかかる費用はスペイン全体で年間19億79万ユーロであり、公的医療費の3%である。すなわち人口の0.1%で医療費の3%を占めている。患者のうち現役で働いている比率は、移植患者のうち39%、在宅透析患者の28%、病院透析患者の22%である(2014年)。また腎臓移植の人数が多いが、ヨーロッパでスペインが第一だそうである。臓器提供の形態は、脳死者から、健常者から、腎臓病患者同士の3種類があるらしい。数値を見ると、次のようである。臓器提供者(人口百万人のうち)スペイン43.4人、アメリカ28.2人、フランス28.1人、イギリス20.3人、ドイツ10.9人、南米8.3人。しかし、なぜかスペインが一番多いのかの理由はわからないとのことだった。多分、文化の違いであろうと想像した。いずれの患者も公的医

療制度の中で基本的に無料とのことであった。

アルセルはコーディネート団体として患者の透析先の病院を探すサービスを主たる業務にしている。というのも、透析ベッド数が少ないので、実施病院を確保するための調整が必要だとのことであった。また、外国からのビジター透析患者の受け入れと病院との調整のサービスもおこなっているし、逆にスペインから外国に旅行に出かける患者の調整も行っている。最近ではスペインから10人ほどの患者グループがギリシャに観光旅行に出かけるアレンジをしたそうである。日本にも透析患者団体はあるのであろうが、このような病院との調整の仕事はしていないのではないだろうか(一般社団法人全国腎臓病協議会)。また観光会社が透析患者ツアーを組織しているようだが、どのようにしているのか聞いてみる必要があるようだ。スペインでは医療制度が患者のためにあるのですね、と言ったら、みんなのためですと即答された。実際はどうかともかく、そのように即答する心意気には好感を持った。

アルセルの機関誌に載っている総会の様子を見ると、支部はスペイン全国に116支部ある。会長挨拶は、透析患者が自由に旅行ができるよう推進することが強調されていた。総会挨拶にはスペイン盲人協会(オンセ)や腎臓移植協会が来賓挨拶をしている。オンセは企業などをいくつか持つ、みずからを社会的経済組織と名乗っている非営利事業組織でもある。また雑誌を見ると若者の患者についての活動、女性と仕事など透析患者が抱える社会的問題などについてもアルセルはいろいろと活動をしているようだが、詳しくはいろいろ読まなければわからない。(その2に続く) ■

(いしづか ひでお、主任研究員)



【本の紹介】

●上田早記子・鎌谷勇宏・藤井渉(著)

「マクロとミクロで考える障害者福祉の事業所経営～社会保障とグループホームの動向～」(NPO法人オルト・クラブ、2018年1月)

ISBN 978-4-99096-761-1、定価：本体1800円＋税

【目次】

第1章 障害者福祉の基礎(藤井)／第2章 障害者福祉の動向と課題(藤井)／第3章 障害者総合支援法と事業所経営(藤井)／第4章 障害者グループホームとその経営(上田)／第5章 医療政策分析からみる障害福祉政策(鎌谷)

本書は障害者福祉に携わる経営者を含む福祉従事者を念頭に、障害者福祉の制度と課題を解説し、障害者グループホームの経営について報酬の仕組みを説明しながら収支実態などの現状を描き、医療政策の流れと具体的政策、診療報酬改定のプロセスや政策誘導をわかりやすく解説し、そこから障害福祉政策について得られる知見を取り上げている。福祉と医療それぞれの制度と課題の背景を現場で互いに知るきっかけとなることができるのではないかと思う。また若手研究者たちが実際に障害福祉サービス事業に携わり研究成果の出版も行うというNPO法人を作ったことで、研究と実践を同時に追求することができている点にも関心を持っている。(竹)

外国語勉強法(2) 石塚秀雄氏の場合(その2)

機関誌やニュースでは非営利・協同セクター、医療・福祉に関する海外の動向を扱います。海外の事例を知るには外国語取得が必要ですが、日頃触れないままに過ごしていると、外国語表記は単なる模様や記号にしか見えません。もう少し外国語を日常へ組み込めないかと思うものの、自分の浅知恵には限界があります。

先達の皆様は、どのように取り組んでおられるのでしょうか。生の声を聞くことが出来るならば眠らせるのはもったいない、ニュースに載せれば他の人にも役に立つ、そんなことでいきなり始まった超私的な企画、不規則連載の予定です(事務局 T)。

質問事項

(0) 名前と肩書き、ご専門など、(1) 何語についてですか(複数の場合もお書き下さい)、(2) 勉強時間、頻度はどのくらいですか。また継続の秘訣は何ですか、(3) 読む、書く、聞く、それぞれのコツはありますか、(4) 専門的にここは押さえないというポイントをお教え下さい、(5) インターネットなどをどのように利用していますか、(6) お勧めの書籍や教材、ウェブサイトなどをお書き下さい、(7) その他、自分で決めていることなどをご自由にお書き下さい

4. 専門的にここは押さえないポイント

スピード、スマート、シンプルのためには次のことが肝要である。

(1) 主語と動詞をまず見つけること。(前号掲載により省略)

(2) 意味の缶詰、文節のブロックで考えよ。

長文でも小分けにして読んでいくことである。そのためには、意味のかたまりごとに、原文に手で斜線を入れて、小分けにするとよい。主部、動詞、述部(補語部分、目的語部分など)にわけるとよい。

(3) 勘所をつかみつつ読む

なにを言いたいかを直感的につかむ心がけが大事である。「あんたばかね」と言ったときに、ほめているのかけなししているのかは文脈の中でしか分からない。正反対の解釈をしてしまうということがあり得る。仮言的表現、婉曲表現などに注意。

(3) 文法学習書は2週間くらいで

まず一回ざっと見て、さらに数回最初から繰り返す。文法の基礎は簡単に身につかない。基礎は初級のものに属するのではなく、すべてに属することである。

(5) 日本語にはない、冠詞、関係代名詞、代名詞には気をつけよ

代名詞はなるべく具体的にイメージあるいは確定すること。「あれ」、「それ」、「彼」、「彼ら」と訳すことはしない。

例 I met John who had been honest before his marriage.

「私は結婚前までは正直者だったジョンに会った」ではなく、「私はジョンに会った。

彼は結婚前までは正直者だった」と理解する。これで読むスピードにブレーキがかかることはない。

(6) 不定詞、完了形について

不定詞は言葉どおり、定まらない言葉である。定まらないとは状況が確定しないこと、これから起きること、未来に起きることである。完了形は、現在形にしろ過去形にしろ

過去分詞が伴う。過去分詞とは過去が固まっていることである。すなわち過去に起きたことを持っているということである。現在分詞、動名詞は、同様に現在が現在としてずっと固まったもの、すなわち継続していることである。

(7)助動詞には気をつける

英語の場合、動詞活用形が単純なので、フランス語などの接続法や可能法といった動詞活用変化の役割を助動詞が果たすことが多い。単純な文法のほうが解釈は難しい。

(8)形容詞には気をつける

民族によって形容の内容、尺度は違う。たとえばヨーロッパ人にとって百年は新しいし、アメリカ人にとっては古い。形容詞が出てきたら、数量的にはどのくらいなのか、ということイメージすること。

(9)数字には気をつける

数字は、聞き取り(ヒアリング)のときの躓きの石である。数字を間違えるのは致命的である。数の数え方の単位は日本では4桁で区切るが、欧米言語では3桁で区切るので、換算するのに手間取ってしまうのである。したがって、数字は特に学習する必要がある。数字の練習は歩いているときに、自動車のナンバープレートが4桁なので、それを口に出してみる。自動車はあっという間に走り去ってしまうので、すぐにまた別の車のプレートナンバーについて数字を言ってみる。たとえばフランス語の場合は、80は4×20(quatre-vingts)とか99は80+19(quatre-vingt-dix-neuf)となるので70から99までの数字はちょっと面倒である。その次に4桁の数字すなわち千いくつという表示で言えるようにする。

5. インターネットをどのように利用しているか

無料の外国テレビ、ラジオ局の番組を見聞きできる。朝起きがけは頭が働かないので、語学学習に向いている。私の場合、英語、フランス語、スペイン語ニュース各10分程度聞く。ラジオのほうが語学学習には向いているようだ。古い文献や本、関心のある資料などはインターネットで検索できることが多い。

6. おすすめの教材、ウェブサイト

大学書林の「4週間」は古くさいが、よい。会話本などは研究目的には二次的なものであろう。よい文法書を何度も学習するのがよい。語学書に付属のCDも適宜活用できる。研究目的の語学ならば、きちんと読めるようになることが第一と心がける。ウェブサイトは語学学習としてはヒアリング目的だけで利用している。英語の場合、イギリス英語はBBC、アメリカ英語はABCニュースなどを聞く。

7. その他自分でできていること

(1) 紙の辞書の場合、マイ辞書を作る

辞書をひくスピードをあげるために、マイインデックスを書き込む。辞書の上3分の1あたりに帯状にa,b,c...と各ページの厚みに合わせて水性ボールペンで記入する。フランス語やスペイン語の場合、c,s,pの単語が多いし、ドイツ語はs,a,b,kが多い。外国語本を読んでいると、辞書に出てない単語がある。その場合、辞書の当該ページに書き込む。そのうち意味が分かる機会が出てくる。スペイン語辞書では約1,000単語を手書き記入した。また引いた単語にはチェックを付けると、自分にとっての重要単語がどんなものかがわかる。辞書を引くことを面倒くさがらないこと。辞書で引いた単語の項目は最後まで見る。一単語一意味主義という考え方はやめる。単語ひとつには、一つの意味だけではなくいくつもの意味が書いてある。たとえばドイツ語では一つの単語が全く逆

の意味も持つ場合が多い。

例 aufheben 破棄する、保存する

また熟語となって、まったく逆の意味になる場合もある。

例 スペイン語の falta 欠如

hace falta 必要

(2)電子辞書の使い方

電子辞書は、その外国語専用の電子辞書が便利である。複数の言語を取り込めば、一台ですむので便利である。私のスペイン語用電子辞書にはフランス語、ドイツ語、イタリア語、韓国語、英語が入っている。①電子辞書のタイムオフ時間を 30 分以上にする。②ひいた単語はメモ用紙に書き出し、意味も書く。メモ用紙は棄てる。無理に単語を覚えようとしない。つねにセンテンスの中での単語である。③メモ用紙はバインダーに挟み使う。余ったコピー用紙などを切ったものを、市販のバインダーに挟む。A4、A6、B5 などの大きさのバインダーが売られている。これは作業効率を良くする。

(3)英語(外国語)を通じて外国語を学習する

外国語をつかって外国語を学ぶというのも効率的で安上がりである。たとえばギリシャ語やラテン語の日本語辞書は、英語やフランス語などに比べると充実しているとはいえないし、値段も高い。だから英語・ギリシャ語辞典とかフランス語・ギリシャ語辞典などを使うと断然辞書の内容が違って便利である。学習参考書についても同様の場合がある。

(4)複数言語同時学習法の心構え

いくつかの言語を学ぶことに躊躇するのは、そんなにいくつもやれないという負担感である。さらに同時にいくつかやると、広く浅くて中途半端になるから嫌だという考えである。欧米の専門家は 4 カ国語を話す人はざらである。その言語の中に東洋語やアラビア語などが含まれることも多い。負担感は、「どの言語も」かなりの水準に「短期間」のうちに達成しようとする完全主義に由来するのである。これは学校教育の弊害のひとつではないかと思われるが、「完全主義」は与えられた評価基準に対して適用しようという姿勢からくる。簡単に言えば、すべて勉強を試験のように考えるところからくる。山登りと同じく、一つの山に登るのは大変であるが、ひとつの山に登れば、高い山が山脈として連なっているので、そこを縦走することは比較的楽である。ヨーロッパ言語では、ラテン系、スラブ系、ゲルマン系などがあるので、ひとつの言語をマスターすれば、同系列の言語を学習するのは、簡単という訳ではないが、縦走と同じく比較的容易である。

(5)どのような文を読めばよいか

専門分野の文献だけを読んでいると、言語的視野が狭くなり、語学力は低いままである。いろいろな文体があり、小説、新聞やニュース記事、自分の専門文章、童話・児童書、広告コマーシャルなどはそれぞれ文体が違ふし、作家により文体は異なる。こうした文体に触れていないと、専門書における微妙な表現を理解することができない。いろいろな文を読むことが語学上達の秘訣であろう。

Fin

※ 2 回にわたり独習のノウハウを種明かししていただきました。より積極的にインターネットを利用した学習法などいろいろありそうです。世代を超えてシェアできるといい情報を、ぜひお知らせください。